

## 能格的なものの発展をめぐって( 9 )

近 藤 健 二

クリモフ(1977; 1983)に代表される内容的類型学の研究は功罪相半ばする。それによって発掘された新事実、蒐集された新知識は、類型学の発展を支える「正の遺産」である。一方、それが混沌たる現象の山を首尾よく体系づける理論を構築しえていないこと、すでに知られている諸事実に整然とした秩序を与えていないこと、とりわけ、能格言語と活格言語が占める歴史的座標を見誤ったことは、これからの研究によって清算されなければならない「負の遺産」であろう。

クリモフは、原初的な言語類型として類別言語を想定したうえで、これが活格言語に転じ、活格言語が能格言語あるいは主格言語に転じたとしている。類別言語から活格言語が生まれたという考えはともかく、活格言語が能格言語あるいは主格言語に先行する言語類型であるという考えは、内容類型学の伝統をひく学者たちの一致した見解である。しかし筆者は、以下の論考の多くの部分で、そのような主張に対していくぶんきびしい判断を下すことになる。

本稿の構成は次のとおりである。はじめの第1節では、活格言語の特質としてしばしば引き合いに出される「有生性原理」の曖昧性について考察する。続く第2節では、活格言語が有生・無生の二項対立とは直接縁のない言語であることを明らかにしようとする。最後の第3節では、有生・無生の二項対立が主格言語の特質であること、印欧語についていえば、文法的な性の区分が生まれる前段階において顕在化したものであることを論証しようとする。

### 1. 「有生性原理」が意味するもの

内容的類型学は能格言語や主格言語に先行する言語類型として活格言語の存在を強調しているが、一部の学者、たとえばクリモフらは、活格言語よりもさらに古い類型として類別言語を措定している。類別言語というのは、名詞を有生・無生という二つ、あるいは男性・女性・中性という三つに分類するのではなく、それよりもたくさんのクラスに分けている言語のことであり、その典型としてバンツー諸語をあげることができる。バンツー諸語の一つであるスワヒリ語では、名詞が以下の1)~6)のように分類されるとともに、名詞が主語あるいは目的語として用いられるとき、分類されたそれぞれが述語動詞と独自の仕方では照応する。

名詞の種類	名詞接頭辞	動詞接辞		
		主語	目的語	
1) 人間	単数	m (u)-, mw-	{ 1 人称 ni- 2 人称 u- 3 人称 a-	{ 1 人称-ni- 2 人称-ku- 3 人称-m-
	複数	wa-	{ 1 人称 tu- 2 人称 m (w)- 3 人称 wa-	{ 1 人称-tu- 2 人称-wa- 3 人称-wa-
2) 植物	単数	m (u)-, mw-	u-	
	複数	mi-	i-	
3) 丸状物	単数	j (i)-, -	li-	
	複数	ma-	ya-	
4) 物	単数	ki-	ki-	
	複数	vi-	vi-	
5) 動物	単数	n (y)-, -	i-	
	複数	n (y)-, -	zi-	
6) 抽象概念		u-	u-	

このような多数の名詞分類が有生と無生、あるいは活性と不活性の二項対立に変化したとするクリモフの主張に呼応して、柳沢(1999)は、スワヒリ語に特徴的な‘Swahilike’と呼ばれる現象、すなわち人以外のクラスに属する名詞が人のクラスの動詞接辞と照応する次のような現象を取りあげている。

(1) n-g'ombe a-mekufa  
 動物 - 牛 人 - 死んだ  
 「牛は死んでいる」

ここでは、上記5)の動物に属する名詞が、1)の人間名詞と照応するはずの動詞接辞と照応している。この現象を、柳沢は、類別構造が有生(活性)と無生(不活性)が対立する「有生性原理」によって侵食されはじめている事例の一つと見ている。また柳沢は、パプア諸語の中にも同種の変化が認められるとして、以下のように述べている。

.....例えば、オク語族(Ok family)のミアンミン語(Mianmin)では、名詞に文法性と数の特徴とする接尾辞をもつ(男性単数-e, 女性単数-o, 複数-i)が、有生名詞にこれらが附くとそれは自然性を表し(naka-e 'man', unang-o 'woman'), 無生名詞に附くとサイズや量を表すという(Foley,

1986:81). この無生名詞の場合、男性の接尾辞は小さなサイズあるいは少量を表し(men-e 'a string bag', imen-e 'small/one taro'), 女性の接尾辞は大きなサイズあるいは多量を表すという(men-o 'string bags', imen-o'large taro/quantity of taro'). なお無生名詞は複数の接尾辞-i とは共起せず、これは有生名詞とのみ用いられる。ここには未だ類別特徴を残しながらも、すでに有生と無生との名詞の2項的対立の強化に向けての傾向があるように思える。また前述したセピック・ラム言語門に属するイマス語(Yimas)においてもこのような傾向が見られる。イマス語では名詞は12のクラスを持つが、この内4つのクラスだけが意味的な特徴付けをもっており、他の8つのクラスは音韻的に類別される。この前者の4つのクラスは、クラス1が男性人間、クラス2が女性人間、クラス3が「豚、犬、ヒクイドリ、クロコダイル」のような高等動物であり、クラス4は植物及び文化的に重要な機能を有する植物の果実であるという(Foley, 1986:86)。そして特に興味深いのは、ここではクラス4の形態型が音韻的クラス(クラス5-12)の形態型と同じであることである。この事実は、この言語の名詞類別の組織が、活性と不活性を基とする2項対立原理に次第に近づいていることを示しているように思える。(241頁)

ここに述べられているように多数の名詞分類が二つのクラスに統合されたという考えは途方もない仮説として退けることはできない。それどころか、多分類から二分類への統合は十分に起こりうる変化である。しかし、そのような変化がたとえある言語において実際に起こったにせよ、そのことは活格言語のすべてが類別言語に由来するものであるということの証拠にはならない。

さて、ここで論じようとするのは、類別言語から活格言語への直線的進化の観念を肯定するか否定するための胸のすくような論を展開することではない。そうではなく、活格言語を支える中心原理としてクリモフらが強調する「有生性原理」の実体を明らかにすることである。まず、「有生性原理」の何たるかについてあらかじめ結論めいたことを述べておけば、それは有生名詞と無生名詞がきびしく対立する原理というよりも、むしろシルヴァースティーンの名詞句階層の原理、すなわち行為者になりやすさの度合いと行為の対象になりやすさの度合いにかかわる階層原理と同質のもののようなものである。少なくとも柳沢(1999:236-237)は、そのような理解に基づいてフォア語(パプア諸語の一つ)における以下の現象を論じている。

- (2) naebá yaga: naninta: a-mu-w-e  
 私 豚 食べ物 3単(目)-与える-1単(主)-叙述  
 「私は豚に食べ物を与える」
- (3) yaga: naebá naninta: a-mu-w-e  
 豚 私 食べ物 3単(目)-与える-1単(主)-叙述  
 「私は豚に食べ物を与える」

- ( 4 ) naninta: naeba yaga: a-mu-w-e  
食べ物 私 豚 3単(目)-与える - 1単(主)-叙述  
「私は豚に食べ物を与える」

フォア語には「潜在的行為者 > 人間 > 生物 > 無生物」という「有生性の階層」があり、それによって主体・客体関係が明白な場合には語順が自由であるという。つまり、上の(2)~(4)に即していうと、「私」「豚」「食べ物」の統語的關係は、「私」が主語で、「豚」が間接目的語で、「食べ物」が直接目的語である。常識的に考えて、これ以外の可能性はありえない。「有生性原理」とは、まさしく、このような統語關係を把握するための「常識の原理」であるといえよう。

ところで、このような「有生性原理」は主語と目的語の關係を把握するための万能な原理ではない。たとえば、同一の階層に属する二つの名詞が主語と目的語であるとき、いずれが主語であり目的語であるかを判別できない。このような場合、フォア語では語順が「有生性原理」を補完する。すなわち、次の例におけるように、「主語 + 目的語」という語順によって主客關係が表される。

- ( 5 ) wa mási a-ka-i-e  
人 少年 3単(目)-見る - 3単(主)-叙述  
「人が少年を見る」  
( 6 ) mási wa a-ka-i-e  
少年 人 3単(目)-見る - 3単(主)  
「少年が人を見る」

しかし、「主語 + 目的語」という語順が、同じ階層の二つの名詞が主語と目的語であるときの唯一の語順ではない。主語となるべき語に能格語尾が付されると、次のように目的語の後に主語を置くことも可能である。

- ( 7 ) mási wá-má a-ka-i-e  
少年 人 - 能格 3単(目)-見る - 3単(主)-叙述  
「人が少年を見る」

このような能格構文は、階層の異なる二つの名詞が主語と目的語となる場合にも用いられる。たとえば、以下の(8)においては「豚」と「人」との階層の違いによって「豚が人を殺す」のではなく「人が豚を殺す」ことが明らかであるので能格構文を用いないが、(9)においてはそのような「有生性原理」が働かないので能格構文によって主客關係を明示しなければならない。

(8) yaga: wá a-egú-i-e  
 豚 人 3単(目)-叩く-3単(主)-叙述  
 「人が豚を殺す」

(9) yaga:-wama wá a-egú-i-e  
 豚-能格 人 3単(目)-叩く-3単(主)-叙述  
 「豚が人を襲う」

フォア語に関する以上の事実は在来の研究によって明らかにされており、ここで改めて検討を要する事柄ではない。問題は、内容的類型学がそのような言語を歴史的にどう位置付けているかである。この点に関して、柳沢(1999)は次のように述べている。

上で見られた共時的な有生性の原理と語順と名詞句の格標示の形態との関係は、これを通時的な原理の変化として見ることも可能であるように思える。即ち、ある言語において名詞句において働いていた有生性の原理の弱化衰退が、これを補う機能として、例えば名詞の(あるいは動詞接辞の)格標示という形態による方法への変化を引き起こした、とする考えである。この名詞の有生性が基本的原理として働いていたと仮定することのできる言語類型は、恐らくクリモフの唱える活格構造の類型であろう。この類型は、名詞を有生(活性)と無生(不活性)の二項に対立する原理によって言語の構造が成り立つ類型である。そしてこの活格類型は名詞の二項対立に相関して、動詞語彙素も他動詞と自動詞の対立ではなくて、行為動詞と状態動詞の対立を原理とする類型である。従ってこの類型ではサピア(Sapir:1917)がダコタ語で始めて言及したような、「自動詞」の主語の inactive と active の対立が認められるのである。(238-239頁)

ここに述べられていることは、要するに、1)有生(活性)と無生(不活性)の二項に対立する「有生性原理」によって成り立つ活格言語が存在したが、2)「有生性原理」が弱化した結果、それを補うための格標示が現れた、ということである。この見解は、クリモフ(1983)の「……活格言語に稀に見受けられる活格と不活格の対立は、活格言語において弱化した、活性類名詞と不活性類名詞の語彙的対立の一種の代償措置であると考えられる」という主張、また名詞曲用の起源を説いたクリモフ(1977)の次の主張と趣旨を同じくする。

注目されるのは、いくつかの活格言語に観察される、格パラダイムの生成に関わる個々の事実である。主格及び能格言語には多少とも発達した名詞形態があり、中立言語や類別型言語ではそれが決して発達していないのに対して、活格言語では、それが最小限の発達特徴を示す、という理由からだけでもすでに、曲用の起源を活格構造の類型に想定することは正当である。(164頁)

実際、先ず指摘しておかなければならないが、全てのことから判断して、名詞曲用は、いくつ

かの活格言語以外にも、活格状態を経験してきた能格及び主格言語にも見られるものであり、現在輪郭を顕しつつある他の二類型 類別型及び中立型 の言語では欠如しているのであって、厳密にいった、それらは決して名詞形態自体を知らないのである（すでに再三指摘されてきたように、類別型言語の名詞形態は、語形成から分化していない）。曲用の形成は、有生と無生という安定した名詞区分が、主体と客体という不安定な名詞「類」に席を譲り始めた正にその時期であったと予測して当然である。正にこの段階位相においてこそ、主体・客体関係の伝達における文法の比重が増大するのであり、このことは、特に活格と不活格の対立の生成に現れている。（164 - 165頁）

以上の引用から知られるように、柳沢もクリモフも、類別言語から生まれた活格言語では「有生性原理」によって主体・客体関係が表されていたけれども、「有生性原理」が弱化した結果、それを補うために活格・不活格の格標示が現れたと見なしている。この考えは、それに対して肯定的な証拠をあげるにも、否定的な証拠をあげるにも、その内容が曖昧である。まず第一に、「有生性原理」の実体はシルヴァースティーンの名詞句階層の原理と同種のもののようだと述べたが、そうではないものとして意図されているのかもしれない。すなわち、「活格言語には有生（活性）と無生（不活性）の対立がある」といった類の表現があちこちに見受けられることから推測して、「有生性原理」は何らかの形態的特徴に基づいた原理かもしれないのである。しかし、仮にそうだとした場合、その形態的特徴が具体的に何であるのかわからない。したがって、クリモフらが想定する原初的段階の活格言語において何が「有生（活性）と無生（不活性）の対立」を惹起していたのかわからないのである。

「有生性原理」が弱化したということの意味も、当然のことながら、曖昧である。もっとも、この点に関しては柳沢が（1999）が、直接補語あるいは直接目的語に近い概念を表す「近い補語」という用語を使いながら以下のように説いている。

従って、この「近い補語」は語彙的には有生（活性）名詞であるけれど、統語機能的には無生（不活性）名詞であると考えることができる。一般に、このような類型の言語の行為動詞を有する構文において、行為者は有生（活性）項であり、被行為者は無生（不活性）あるいは行為者の階層より低いもの（つまり Silverstein の階層化のより右側の項）の場合がより多く起こりうるはずである。……（中略）しかし今ここで検討したように、近い補語として現れた語彙意味的な有生（活性）名詞の統語機能的な無生（不活性）名詞化は、ここに同一名詞の有生性に対して語彙的意味と統語機能的意味との乖離を引き起こすはずである。このような意味の乖離は、名詞の有生性原理そのものの土台を揺がすものであり、このことが「近い補語」という概念を「直接補語」という概念に変質させる萌芽だと、考えることができる。（244頁）

ここで述べられていることを簡単にいいかえれば、次のようになろう。行為動詞を用いた文の主語はもっぱら有生名詞であった。一方、行為動詞の目的語(「近い補語」)には無生名詞をあてるのが普通であったけれども、有生名詞をあてることもあった。主語として用いるのが通例の有生名詞が、無生名詞の占めることの多い目的語の位置を占めることによって、有生名詞と無生名詞の仕切りが不鮮明になった。こうして、有生・無生という二項対立のきびしさが失われた、というのである。

これは、筆者の誤解がないとすれば、おかしな説明である。目的語(「近い補語」)に有生名詞をあてるのは、はじめから存在した用法であろう。仮に、その用法が有生・無生の対立を弱化させるというのであれば、そのような対立ははじめから存在しなかったのではなからうか。「有生性原理」が弱化したという考えは、有生・無生のきびしい二項対立が存在したという考えと同様に、実体を伴わない想定のように思われる。

## 2. 活格言語を特徴づけるもの

「有生性原理」が有生・無生の二項対立ではなく、シルヴァースティーンの名詞句階層にかかわる原理であるならば、そのような原理とそれを補完する語順によって主客関係を表す言語は、能格言語の後に現れる活格言語とは明確に区別されねばならない。それは、中立型言語というべき言語類型である。先に例示したパプア諸語の一つであるフォア語は、活格言語から生まれた能格言語ではなく、中立型言語から生まれた発達初期段階の能格言語であるといえよう。<sup>1</sup>

内容的類型学では、活格言語の認定の仕方がやや安易に流れているように思われる。パプア諸語に属するエンガ語では7個の異なる存在動詞が7種類の異なる名詞類を主語としてとることがラング(1975:47-48)の研究によって知られているが、柳沢(1999:239-240)はその事実をもってエンガ語が「活格言語の特徴」、おそらく「初期活格構造を反映した名詞類別の残滓」を有すると見ている。この考えは、活格言語の初期段階にあるといわれるナヴァホ語(北米インディアン語の一つ)に類別的な用法をもつ12個ほどの存在動詞があるという事実と照らし合わせれば、きわめて自然な発想のようにも思われる。しかし、エンガ語における7個の存在動詞と7種の名詞類との共起関係を類別言語の残滓とするのは、いささか根拠薄弱であろう。またそれを根拠にしてエンガ語がかつて活格言語であったと仮定するのは、日本語の存在動詞「いる」と「ある」が使い分けられるという事実をもって、あるいはまた日本語の複数接辞「たち」や「ども」が人間名詞や動物名詞にしか付せられないという事実をもって、さらにはまた「(人間の)声」と「(動物の)なき声」と「(物の)音」あるいは「(人間の)ごはん」と「(動物の)えさ」と「(植物の)こやし」に使い分けが観察されるという事実をもって、

日本語がかつて活格言語であったと仮定するようなものではあるまいか。

なるほど、日本語では「みずからの力によって動くことのできるもの」の存在は「いる」で表され、「みずからの力によって働くことのできないもの」の存在は「ある」で表されるという意味において、「いる」は原則として有生物名詞（植物名詞を除く）と結びつき、「ある」は原則として無生物名詞（植物名詞・抽象名詞をも含む）と結びついている。<sup>2</sup>また、日本語の複数接辞「たち」「ども」「ら」は原則としてシルヴァースティーンの名詞句階層の上位の名詞にしか付せられないという意味において、それらは「有生性原理」と無縁ではない。<sup>3</sup>しかしこれらの事実、有生物と無生物を区別しようとする認識が日本語の周辺部分に反映していることを物語るものにすぎない。上述のエンガ語における存在動詞にかかわる諸事実も、そのようなものとして理解すべき事柄ではなからうか。

活格言語の特徴づけに危うさを感じることはほかにもいろいろとある。たとえば、人称代名詞の 1 人称複数形に包括形（聞き手を含めて「われわれ」というときの形態）と除外形（聞き手を除いて「われわれ」というときの形態）との区別が多くの言語に存在することは周知の事実であるが、クリモフらはこの区別を活格言語に特徴的な「包含事象」と見なしている。そして、その区別が能格言語に観察される場合には、それは活格言語から受け継いだ「随伴事象」として説明される。それにしても、包括形と除外形は活格言語でも能格言語でもない言語にいくらかでも見られる形態である。たとえば北海道アイヌ語の沙流方言では aoká が包括形で、cóka が除外形である。<sup>4</sup> 琉球語には、包括形の ア〔ʔa〕とアガーミ〔ʔaga:mi〕、除外形のアッター〔watta:〕がある。筆者の知る限り、オーストロネシア語族に属するほとんどの言語において、人称代名詞の 1 人称複数には包括形と除外形の区別を有する。しかし、それらの言語のいくつかは能格言語の特徴を備えているけれども、それらがかつて活格言語であったという証拠はない。いわんや、それらがいま活格言語であるという証拠は何一つない。

このようにいうのは、いい過ぎかもしれない。というのは、山口（1995：91 - 92）がいうように、「インドネシアとメラネシアの諸語、フィリピンのタガログ語、ミンダナオ島のダバオの北に分布するディババウオンの言語なども、活格言語に属する可能性があるといわれる」からである。山口自身、ポリネシア諸語の一つであるサモア語を取りあげ、それが活格言語の可能性があると以下のように述べている。

前にも少し触れたが、欧米並びに日本の類型学においては、活格言語類型を能格言語類型と原理的に異なったものであるとは考えていないように見える。コムリーの論文「能格性」の中には、ポリネシア諸語に属するサモアの言語の例が、いわゆる split ergativity の特殊な例として引用されている。すなわち、この言語においては、「よりダイナミックな動詞」more dynamic verbs



のばあいには能格構文が用いられ、「より静的な動詞」more static verbs のばあいには主・対格構文が用いられるというのである。たとえば、

'Ua sosi e le tama le ufi.  
Tense cut Erg. the boy Abs. the yam  
"The boy cut the yam."

に対して、

'Ua alofa le tama 'i le teine.  
These love Nom. the boy Acc. the girl  
"The boy loves the girl."

ここで絶対格と主格は同じく無徴であり、能格の *e* と区別されているという。しかしこれは見方によれば活格言語であると考えの方が、適当であるように思われる。筆者はこれについて判断する知識はもち合わせていないが、クリモフは以下にみるように、インドネシアおよびメラネシアの諸語を、活格言語に数えているのである。(90 - 91頁)

このような山口の見解にもかかわらず、筆者の考えでは、サモア語が活格言語である可能性は皆無である。コムリーが「静的な動詞」としているのは *alofa*「愛する」、*mana'o*「欲する」、*va'ai*「見る」などの中間動詞と呼ばれるもののことであり、このような意味を表す動詞はサモア語以外の能格言語でも能格構文をしばしばとらない。活格言語の統語特徴は、「動的な動詞」に対して自動詞・他動詞の区別なく、活格的形態があてがわれることである。しかしサモア語では、「動的な自動詞」を用いた文の主語が活格的形態をとることはない。問題の形態 *e* は、それが受動文の行為者マーカーか道具・手段を表す具格マーカーとして用いられる場合を除けば、他動詞文主語に付される、れっきとした能格マーカーである。

いまここでは、活格言語についての筆者の発見を提示しているのではなく、活格言語の特徴として従来提示されてきた見解に否定的証拠をあげようとしているのだが、以下、深い真理を衝いているとは思えない言説をさらに三つ紹介しておこう。一つは、自動詞と他動詞の区別に関する事柄であり、もう一つは動物と植物にかかわる語彙が一致する問題についてである。それにもう一つは、活格言語に有生・無生の対立が本当に存在したかどうか、についてである。

自動詞と他動詞の区別を欠くのは、クリモフらによれば、活格動詞の「包含事象」である。このことを、山口(1995)は次のように説いている。

逆にいえば、行為動詞は、活性名詞によって表される行為を示しており、それが意味上の自動詞であるか、または意味上の他動詞であるかにはかわりがない、ということになる。たとえば「産む」、「産まれる」、「死ぬ」、「育つ」、「育てる」、「行く」、「走る」、「跳ぶ」、「倒れる」、「横た

わっている」、「食べる」、「飲む」、「話す」、「泣く」、「切る」、「捕まえる」、「壊す」、「持っている」、「与える」、「焼く」、「雷が鳴る」、「稲妻が光る」、「雨が降る」などのような動詞がこれである。(95 - 96頁)

このように活格言語では自動詞と他動詞が文法的に關与的でないとするれば、たとえば「死ぬ」と「殺す」、「燃える」と「焼く」、「乾く」と「乾かす」、「横たわっている」と「置く」、「目覚める」と「起こす」、「倒れる」と「倒す」、「行く」と「運ぶ」、「走る」と「追う」、「這う」と「引きずる」のようなものは、同じ語によって表されることになる。(96頁)

……また活格言語のばあいには他動詞と自動詞という区別はなかったとされるから、同じ語が自動詞としても、また他動詞としても用いられるということが可能になる。可変動詞である。このような動詞は能格言語のばあいにもみられることが多かったが、能格言語の原理からは説明することができず、随伴事象であった。これに対して活格言語の原理からは直接説明できるから、これは活格言語の包含事象であるといえる。(97頁)

これらはいくぶん同語反復的で、曖昧さを含んだ説明である。「活格言語では自動詞と他動詞が文法的に關与的でない」とはどういうことであろうか。それは単に、自動詞と他動詞の形態があらゆる場合に同一であるという意味なのか。そうではあるまい。その意味はおそらく、特に行為動詞を用いた文の主語の形態と、主語と照応する動詞接辞の形態が自動詞文でも他動詞文でも違わない、ということであろう。実際のところ活格言語では、主語の形態あるいは主語を投影する動詞接辞の形態は行為を表す文と状態を表す文との間でのみ差異が観察され、自動詞文と他動詞文との間では完全に同一である。しかしそういう意味においてなら、日本語や英語でも「自動詞と他動詞は文法的に關与的ではない」のではなからうか。中国語ではどうだろうか。中国語には、自動詞用法と他動詞用法とで形態の異なる動詞は存在しない。つまり、中国語の動詞は本質的に可変動詞なのである。可変動詞の存在が活格言語の原理によってのみ説明できるという主張は、筆者の理解を大きく超えている。

次に、動物と植物に関する語彙が一致する問題について考えてみよう。山口(1995)は、クリモフ(1977)に基づきながら、そのことを次のように述べている。

活格言語は、名詞を活性と不活性に分けている。植物は生物ではあるが、行為に積極的に参加するわけではないから、不活性に属すると考えられる。しかし活性にはかつて生物すべて、すなわち動物と植物が属していたことを示すと思われる、多くの現象がみられる。(100頁)

さらに山口は、クリモフに従いながら、活性にすべての生物が属していたことを示す根拠として、活格言語ではたとえば「血」と「樹液」、「角」と「枝」、「耳」と「葉」、

「皮」と「樹皮」、「身体」と「幹」、「肉」と「果肉」、「頭」と「樹冠」などの名詞、また「殺す」と「伐倒する」、「泣く」と「樹液が滲出する」などの動詞がしばしば同一であるという事実をあげ、これを活格言語の「包含事象」と見なしている。そして、能格言語ではそれらの語彙が部分的に一致するとして、それを能格言語の「随件事象」と見なしている。なお、クリモフ(1977)によれば、この「随件事象」は以下のようにしてその影を薄くしていったという。

活格構造が機能するにつれて、初期活格段階位層にとって最も特徴的であった、人体部分と植物部分との相関概念の語彙素の同一性(例えば、「皮膚」～「樹皮」、「耳」～「葉」、「つもの」～「枝、大枝」、等)といった随件事象は、益々その地位を失って行くのである。このことと並行して、このような同一性を使った語形成モデルである、「皮膚+樹木」=「樹皮」、等のタイプのももの、その造語力を失っていくのである。しかし、この過程は、極めて緩慢に進行していったものであるために、こうした性格の個々の同一性は能格言語あるいは主格言語でさえ見受けられるが、それは特にその構造が未だに活格構造との接点を残している言語に見受けられる(例えば、アブハズ・アディグ諸語、マヤ・キチェ、カルトヴェリ諸語、等において)。(125頁)

古い言語類型において動物と植物にかかわる語彙が一致していたという考えは、空想に満ちている。それに対して十分な科学的根拠を与えることは難しかろうが、それは決してこじつけに類する説明ではない。また、取るに足らない説として一笑に付してしまうほど現実ばなれした説明でもない。しかしこの仮説がはらむ難点は、なんといっても、動物と植物に共通の語彙を用いることが何ゆえに活格言語の「包含事象」であるかについての説明がないことである。それは単に、植物名詞がかつては有生名詞の側に属したことを傍証しようとしているにすぎない。つまり、有生・無生の仕切り方を問題にしているだけで、有生・無生の区別が存在したかどうかを論じているわけではない。ましてや、そのような区別が活格言語の特性であったことを論証しているわけではない。

従来の研究では、実際、活格言語に有生・無生の二項対立の存在することが証明を与えられぬままに真とされてきた。しかし後で述べるように、有生・無生の対立は活格言語の特性ではなく、活格言語の後に現れる主格言語の特性である。もう少し正確にいうと、有生・無生の対立のきびしさは主格言語の初期段階、つまりインド・ヨーロッパ語についていえば、男性・女性・中性という文法的な性の区分が生まれようとするまさにその時期に最大となったのである。このことを論証するには、まず、活格言語の文法構造をもう少し具体的に見てみなければならない。

活格言語の特徴としてさまざまな「包含事象」と「随件事象」があげられはするけれども、活格言語の本質的特徴は行為と行為以外、特に行為と状態とを区別しようとするところにある。したがって、それらの区別にあずかる文法的形態が活格言語には不可欠

である。むしろ、そのような形態が備わっているかどうかによって、ある言語が活格言語として認定されたりされなかったりする、というべきであろう。これまでクリモフらが行ってきた認定の仕方は、その点で若干きびしさを欠いていたように思われる。

活格言語において行為と行為以外のものとを区別する形態は、通例、動詞の人称接辞である。それを例示するために、グアラニー語（南米のトゥピ・グアラニー語族に属する代表言語の一つ）の動詞人称接辞を坂東（1979；1981）に準拠して示してみよう。

人 称		活性系列		不活性系列	
		第 1 型	第 2 型	第 3 型	第 4 型
単数	1 人称	a-	ai-	xe-	xe-
	2 人称	re-	rei-	nde-/ne-	nde-/ne-
	3 人称	o-	oi-	i-/φ-	h-/φ-
複数	1 人称包括形	ja-/ña-	jai-/ñai	ñande-/ñane-	ñande-/ñane-
	1 人称除外形	ro-	roi-	ore-	ore-
	2 人称	pe-	pei-	peude-/pene-	peude-/pene-
	3 人称	o-	oi-	i-/φ-	h-/φ-

これは規則動詞の接辞体系である。規則動詞は第 1 型から第 4 型までのいずれかの型の接辞をとるのだが、活性系列（第 1 型と第 2 型）の接辞をとる動詞と不活性系列（第 3 型と第 4 型）の接辞をとる動詞の間には、明確な意味の違いが認められる。すなわち、前者は「すわる」「歩く」「与える」「噛む」「掃く」などの行為性の強い動詞に付せられ、後者は「勝つ」「あきあきする」「心配する」「思いだす」「喜ぶ」「忘れる」「健康である」「斜視である」などの状態性の強い動詞、ないしは行為性の希薄な動詞に付せられる。下に、活性系列と不活性系列の接辞の用いられる例をあげておこう。

- (10) xe-ñembyahi      ja-karú-pa      ro-karú-ma  
 私 - 空腹だ      私たち - 食事をする - 疑問      私たち - 食事をする - 完了  
 「おなかがすいた」「食事をしようか」      「私たちはもう食事をした」

ところで、動詞人称接辞に関してなお一つ見逃すことができないことがある。それは以下に示すように、不活性接辞が主語だけでなく他動詞の直接目的語を表すことができるという事実である。

- (11) xe-peté      re-peté      a-ne-peté  
 私 - 打つ      あなた - 打つ      私 - あなた - 打つ  
 「(彼は)私を打つ」      「あなたは(彼を)打つ」      「私はあなたを打つ」

活性接辞がたいい他動詞に付せられるのに対して、不活性接辞は、それが主語を表す場合、もっぱら自動詞に付せられる。そのような不活性接辞が他動詞目的語をも標示

するという事実は、活格言語が能格言語の規格からさほど大きくはずれていないことを示している。実際、活格言語の代表格であるグアラニー語を能格言語の一つであるアプハズ語(カフカースのアプハズ・アディゲ諸語に属する言語で、主体・客体関係を動詞の人称接辞によって表す)と比べてみると、基本的な文法構造の少なくとももうわべにおいては、行為動詞を用いた自動詞文においてグアラニー語の動詞が活格的形態をとるのに対して、アプハズ語の動詞が能格的形態をとらない、という違いしか認められない。活格言語と能格言語との差異は何か、その根元は何か、それはどんなに根深いものかという執拗な問いを発して帰ってくるのは、活格言語と能格言語を白と黒のように画然と区別するのは誤っているという答えである。

むろん、このような主張に対しては、表面的特色をもとにして広汎な結論に飛びつくべきではないという非難が放たれよう。あるいは、有生・無生の二項対立こそ活格言語を活格言語たらしめている根本原理であるという反論が返ってこよう。しかし、活格言語には有生と無生の対立はないというのが本当である。そのような対立があるという思い込みは、「論理の飛躍」による錯覚である。あるいは、「論理のすりかえ」による架空の想定である。その種の不備は、次に引用する山口(1995)の論述の中にも見てとることができる。

……すでに述べたように、活格言語は動詞を行為動詞と状態動詞に区別することを基本にしているから、対象も行為の意味上の主語になれるものと、そうでないものとに分けることになる。したがってこれらの言語では名詞の「活性」animateと「不活性」inanimateの区別も、包含事象であるということになる。(95頁)

このような論を一旦認めるとして、では、具体的にどのような名詞が活性に属し、どのような名詞が不活性に属しているというのか。この点に関して、クリモフ(1977)は北米インディアン語のハイダ語を取りあげて以下のように述べている。

活格構造の最も重要な語彙的包含事象の一つは、あらゆる名詞を活性類と不活性類に二項分類することと見なすべきであるが、この区分の構成は、現実の指示対象が生命的活力(vital activity)や生命環(life cycle)を持つか持たないかという特徴面での差異を反映したものとなっている。これによって、ハイダ語の名詞の活性類には、人間、動物、樹木、植物を表示するものが入っている:例えば djáda「女」, 'auga「母」, gaxá「子供」, xa「犬」, kat「鹿」, tçu「紅松」等を参照。反対に、不活性類に属するのは、その他残余の事物や現象全ての名称である:同語における gwai「島」, gayu「海」, góya「岩、崖」, tágun「毛皮」, na「家」, kun「鼻」等を参照。したがって、専門文献において支配的な区分である、両類の、「有生」(animate, belebte等)と「無生」(inanimate, unbelebte等)という区分用語は、よく過去の言語学で「活生性範疇」(classification vitaliste,

Vitalitätskategorie) という認定を受けていた、当該分類の論理的基盤を全く正しく反映したものであることは認めなければならない。(67頁)

ここでいま、上に引用した論述にどのような論理上の不備があるかを指摘しておかねばならない。まず、「活格言語は動詞を行為動詞と状態動詞に区別する」という考えは、たとえばグアラニー語についてはあてはまるが、ハイダ語など多くの活格言語にはあてはまらない。グアラニー語では、先にあげた例からわかるように、行為動詞は常に活性接辞をとり、状態動詞は常に不活性接辞をとる。それゆえ、動詞に付せられた接辞を見ただけで、その動詞が活性に属するか不活性に属するかをいいあてることができる。というより、行為と状態という二つの意味に対応する二つの系列の接辞が動詞に付せられるからこそ、グアラニー語の動詞は二つの類に分かれている、ということができる。一方、ハイダ語などには、動詞を二分類する形態は存在しない。もし仮にハイダ語などの動詞が意味のうえから行為動詞と状態動詞に分けられるというのであれば、活格言語ではない言語、たとえば日本語や英語も、「動詞を行為動詞と状態動詞に分けている」ということになる。

行為と状態が区別されることと行為動詞と状態動詞が区別されることを混同しないようにいましめたくて、次に、活格言語の名詞区分について考えてみよう。活格言語には、はたして、名詞区分を支えるなんらかの接辞があるのだろうか。仮に有生・無生という意味区分に対応する二系列の接辞が名詞に付せられるならば、有生・無生の二項対立があるといえよう。しかし、そのような区分を標示する形態はグアラニー語には存在しない。ハイダ語においてもしかりである。ハイダ語では、以下に例示するように、さまざまな類別詞が動詞接辞としては用いられるけれども、名詞にはなんらの接辞も付かない。

(12) la'ia            L!      tc!is-ɣid-a's  
 つるこけもも 彼ら 立方体の物 - 拾う - 分詞

「彼らはつるこけももを箱いっぱい拾った」

(13) maT    qā'hi    la      gi-ga-L!xa-sga-s  
 山羊 内側 彼 毛布のような物 - 持って行く - に向かって - 海へ - 分詞

「彼は山羊の内側を海のほうへ持って行った」

名詞の二分類を支える形態が名詞自体にはないにしても、名詞と行為動詞、名詞と状態動詞との結びつきによって名詞が二つの類に分かれている可能性も考えぬわけにはいかない。もし仮に行為動詞と結びつく名詞が決まってい、それらが状態動詞とは結びつかないとしたならば、そしてまた状態動詞と結びつく名詞が決まってい、それらが

行為動詞とは結びつかないとしたならば、名詞も行為動詞と状態動詞の分類にそって二つに分かれているということになろう。しかしながら、そのようなことは実際にはありえない。なぜなら、たとえば「人間」という名詞は行為動詞と状態動詞のいずれを用いた文の主語にもなれるし、行為動詞の目的語にもなれるからである。もっとも、たとえば「家」という名詞は状態動詞を用いた文の主語が行為動詞の目的語にしかなれそうにないので、この事実に出立して、動詞との共起性から名詞分類を試みることもできない。しかし、そういう仕方では活格言語の名詞を有生名詞と無生名詞に分けられるとすれば、同じやり方で、たとえば日本語や英語の名詞も二分類することが可能であろう。

以上に述べた理由により、活格言語には有生・無生の二項対立は存在しないと断じざるをえない。「いる」「ある」との共起性によって日本語の名詞を大きく有生類と無生類とに二分類することが理論的には可能であるという事実を嘆息しめるならば、活格言語では名詞の二項対立が日本語ほどにも顕在化していない、ということができよう。

### 3. 二つの生の起源

有生・無生の対立は、活格的形態が主格的形態に転じたときに顕在化したものである。そしてこの二項対立は、主格的形態が無生名詞に及ぶことによって男性・女性・中性という性の区分が生まれようとするとき、そのきびしさを増した。これが本節の主張の結論である。以下の論考では、そのような変化がなぜ、どのように起こったかという疑問に答えていくことになるのだが、あらかじめ活格的形態の何たるかをいま一度確かめておこう。

活格的形態には二つの種類がある。一つは動詞に付せられる人称接辞であり、もう一つは名詞・代名詞の活格形である。トウピ・グアラニー語属に属するグアラニー語やカマユラ語では行為と状態を動詞人称接辞によって表現し分けるが、ハイダ語やトリンギット語など北米インディアン語の活格言語では代名詞がその役目を果たしている。もっとも、代名詞における活格と不活格の形態的区別は、それを知る言語にあっても部分的なものではない。つまり、代名詞のパラダイムは活格と不活格が多くの場合に同形である。一方、名詞に関しては、明確に活格と断定できるものは存在しない。ただし、前の稿で触れたように、カフカースのナフ・ダケスタン諸語において自動詞文主語に頻繁にあてられるという能格は活格と呼んでもよさそうな形態である。また、イペローカフカース語においては自動詞文で絶対格形を、他動詞文で能格形をとっていた主語が自・他両構文でもともに能格形をとるようになったというが、この能格形はまさしく活格形と呼ぶにふさわしい形態である。クリモフ(1983:94)は、名詞における活格・不活格の対立を動詞人称接辞が弱化したことによる代償措置と見ているけれども、前稿で述べた

ように、活格は能格が自動詞文に波及することによって生まれた格である。そしてこの活格こそ、来たるべき言語類型の屋台骨を支える格、すなわち主格言語における主格の礎となった格である。

活格はどのようにして主格に転じたのか。筆者は、この変化の過程を以下のように想定する。

- 1) 活格言語：行為の主体 = 活格  
状態の主体 = 不活格
- 2) 中間言語：行為の主体 = 活格  
状態の主体 = 不活格または活格
- 3) 主格言語：行為の主体 = 主格 (< 活格)  
状態の主体 = 主格 (< 活格)

1) の活格言語の段階では、行為の主体は活格で、状態の主体は不活格で表される。2) の中間言語の段階では、行為の主体はもちろん、状態の主体もしばしば活格で表されるようになる。そして3) の段階では、状態の主体も行為の主体と同様にもっぱら活格で表されるようになる。しかし活格は、行為の主体と状態の主体を表現し分けることに存在の基礎があったので、活格と呼ばれる資格を失うことになる。こうして主格というべき格が誕生したのである。以上のように、活格から主格への変化は行為と状態を表す文の主語に同一の形態をあてようとしたために起こった変化であり、これは行為を表す文の主語に自動詞文・他動詞文の区別なく同じ形態をあてようとしたために起こった変化、すなわち能格の活格化と軌を一にする変化であった。

しかし活格の主格化は、能格の活格化とは根本的に異なる結果をもたらした。活格語尾というのは、能格語尾もそうだが、ある特定の名詞の専有物ではない。もちろん、活格語尾の付きやすい名詞群とそれの付きにくい名詞群があることは確かだが、活格語尾というのは名詞が行為の主体を表す場合にだけ身にまとう「仕事着」のようなものである。一方、主格語尾は名詞が行為の主体を表すときにも状態の主体を表すときにも身に付けている「普段着」のようなものである。なるほど、「仕事着」と「普段着」が同じ衣服であるように、活格語尾と主格語尾も同じ格語尾である。それは確かにそうだが、ある名詞が主語となる場合にいつも現れる主格語尾と、その名詞が主語となる場合にいつも現れるとは限らない活格語尾とは、それらが語の一部として認識される度合いにおいて大いに異なるというべきであろう。

活格の主格化は、実際のところ、名詞が主格語尾を語の一部として獲得する過程であ



る。問題をこのようにとらえるとき、一つのものの見方が芽生えてくる。それは、活格の主格化、つまり名詞による主格語尾の獲得が漸次的な変化であったということ、したがって主格語尾を早くに獲得した名詞群とそうでない名詞群が存在したであろうこと、そしてそのことが名詞分類になにがしかの影響をおよぼしたにちがいないということ、である。

主格語尾を獲得しやすい名詞群とそうでない名詞群があったと考えるのは自然なことである。おそらく、主語として用いられることの多い名詞、すなわち人間名詞と動物名詞は主格語尾を容易に獲得したであろう。なぜならば、そのような名詞はもともと行為の主体を表すための活格として用いられることが多く、したがって活格語尾を受け継いだ主格語尾との結びつきが強かったからである。反対に、主語としてよりも目的語として用いられることの多い名詞、具体的には植物を含めた無生物や抽象物を表す名詞は主格語尾を容易に獲得できなかったであろう。なぜならば、そのような名詞は行為の主体を表すための活格として用いられることがほとんどなく、したがって主格語尾との結びつきが弱かったからである。実際、そのような名詞は、状態の主体を表す場合でも、それに主格語尾が付されることはなかったのである。こうして、名詞は二つの類に分かれることになった。すなわち、主格語尾を有する名詞群と主格語尾を欠く名詞群にである。これはまさしく、有生・無生の対立を意味するものにほかならない。

このことについて、もう少し言葉を足しておこう。活格の主格化が起こる以前にも、名詞は類を構成していた。階層が高く主語になりやすい名詞群と、階層が低くて主語になりにくい名詞群という類があったはずである。ソシュールの言葉を借りるなら、それぞれが連合関係 *rapport associatif*、または範列関係 *rapport paradigmatique* にあったといえる。しかし、その関係は無意識的な存在、あるいは潜在的なものにとどまったであろう。なぜなら二つの類は、ちょうど春・夏・秋・冬という季節がそうであるように連続体を成し、その境界線が定かではなかったからである。その区分は、一方が人間名詞・動物名詞を中心とする名詞群、他方が無生物名詞・抽象名詞を中止のする名詞群というほどのものでしかなかったと推定される。

しかし主格の形成は、潜在的な連合・範列関係を顕在化させる変化であった。なぜなら主格語尾は、ある名詞が主語として用いられるときに決まって現れる形、つまりその名詞に固有の形態となったからである。そして、そのような語尾を有するに至った名詞群は、それまでよりも鮮明に、一つの集合体として意識されるようになった。命名しがたいものが命名しやすい集合に、見えにくい集合が見えやすい集合になって現れたこのときに文法的な生の区別が生まれた、ということができる。

ところで、有生・無生の二項対立は常に有標 *marked* と無標 *unmarked* の対立に根ざしているとは限らない。というのは、たとえば印欧語の場合、二つの系列の有標の主格語

尾が有生名詞と無生名詞を分けていたからである。柳沢（1999）は、ガムクレリゼとイヴァーノフ（1984：275 - 281）に基づいて、印欧祖語の名詞組織とその言語類型を次のように説いている。

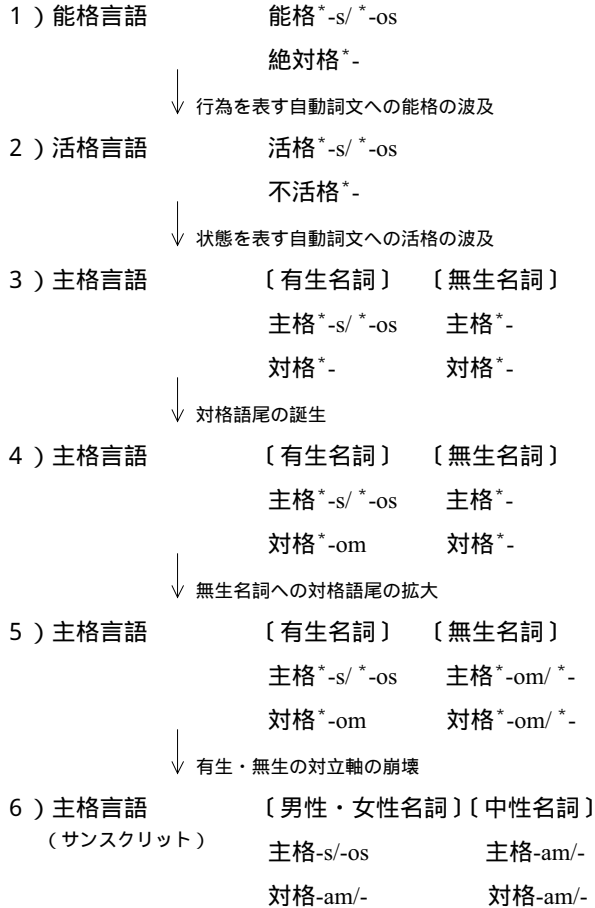
……ここでガムクレリゼらは印欧語の名詞組織の最古の発達段階として、接尾辞<sup>\*</sup>-s/<sup>\*</sup>-osをとる活性クラスと接尾辞<sup>\*</sup>-om, <sup>\*</sup>-t', <sup>\*</sup>-t<sup>h</sup>l, <sup>\*</sup>-k<sup>h</sup>l, <sup>\*</sup>-をとる不活性クラスの二分法の存在を仮定している。例えば、同語根からこれらの接尾辞によってそれぞれ二つのクラスの語が形成された。例：PIE <sup>\*</sup>p<sup>h</sup>l et's「足（活性クラス）」(Skt. pát, Lat. Pes, Gk. Poús); PIE <sup>\*</sup>p<sup>h</sup>l et'-om「足跡（不活性クラス）」(Skt. padám, Gk. pédon, Hitt. pedan)。この活性クラスは後に男性名詞と女性名詞に分裂したが、この対立は純粹に文法的なものであり、その指示物が男性か女性かどうかには厳密に依拠しなかった。勿論、このような印欧祖語における名詞の二分法は、印欧祖語を「能格構造」と見なした他の論者たちによって指摘されてきた。しかし名詞のこの二分法だけでなく、それと相関する動詞の二分法、及び他のレベルの構造特徴全体を考慮するならば、印欧祖語が「能格言語」ではなくて活格言語であったことは明白である。(251頁)

その昔、印欧語が名詞を有生・無生の二項に区別していたことは事実であろう。しかしそのことは、印欧祖語が活格言語であったことの証にはならない。またそのことは、印欧語がかつて能格言語でなかったことの証にもならない。それがそのように見えるとすれば、有生・無生の対立を活格言語の特質と見ているからである。また、活格言語が能格言語よりも古い言語類型であると考えからである。ところが、そういう前提ないしは予断が狂っている。事実はその正反対である。上述のとおり、有生・無生の対立は主格言語になって現れた特質である。また前稿で述べたとおり、活格言語は能格言語から生まれたと見なさなければならない。それゆえ印欧語に関しても、活格言語の前段階に能格言語の存在を想定すべきである。しかしいま検討しなければならないのは、そういう問題ではない。ここで検討しなければならないのは、かつての印欧語に存在したと仮定される有生語尾と無生語尾、すなわちガムクレリゼらが措定している有生系列の<sup>\*</sup>-s/<sup>\*</sup>-osと無生系列の<sup>\*</sup>-om/<sup>\*</sup>-t'/<sup>\*</sup>-t<sup>h</sup>l/<sup>\*</sup>-k<sup>h</sup>l/<sup>\*</sup>-の出自である。

有生系列の<sup>\*</sup>-s/<sup>\*</sup>-osは、もとをただせば、属格・奪格マーカーであったろう。多くの能格言語において具格が能格になったのと同じように、印欧語では奪格、あるいは奪格的な属格が能格になったと考えられる。<sup>5</sup>その後、それは活格になり、そして主格に発展したのである。

無生系列の主格語尾のうち<sup>\*</sup>-はゼロマーク、すなわち無標であるから問題ではない。それは能格言語の絶対格、活格言語の不活格を引き継いだものと見なしてよい。一方、無生系列の<sup>\*</sup>-omはもともと、方向を表す副詞的なものから発達したといわれる対格の語尾であったと考えられる。<sup>6</sup>そのような形態がいったいどうして無生名詞の典型的な主格

マーカーになったのか。筆者の考えるその変化の過程を、有生系列の\*-s/\*-os と比べながら下に示してみよう。



これは印欧語における主格・対格単数形の発達過程の大筋を簡略的に示したものである。1)の能格言語と2)の活格言語の段階を経て成立した3)の主格言語の段階では、不活格を受け継いだ対格は格語尾ゼロであった。次の4)の段階で、主体・客体関係が強化されるに伴って、有生名詞の対格は\*-omという語尾を有するに至った。一方、無生名詞の対格はゼロ語尾のままにとめおかれた。というのも、無生名詞は基本的に他動詞の目的語が自動詞文の主語にしかならなかったため、主体・客体関係を明示するための形態を必要としなかったからである。しかし5)の段階で、無生名詞は\*-omという語尾を対格語尾として、また同時に主格語尾として獲得した。この変化を惹起した刺戟要因は、有生・無生の区別なく対格を同形にしようとする動因と、主体・客体関係を明示す

るための形態が不必要な無生名詞を主格・対格同形のままとどめようとする動因とが合一したものである。<sup>7</sup>ところで、5) はガムクレリゼらがいう印欧祖語の段階、つまりガムクレリゼらが主格・対格の代わりに活格・不活格を措定している段階であるのだが、すでにそこにおいて有生・無生の区別が崩れかけている。有生語尾の \*-s が付せられた \*p<sup>h</sup>et 's 「足」は、そのことを示す一つの例である。なお、最後の 6) はサンスクリットにおける名詞組織の一部を示したものである。ここでは新たに男性・女性・中性という区別が生まれているが、かつての二項対立の影も色濃くそこに残っている。

以上のように、\*-om が有生系列の対格語尾から無生系列の主格・対格語尾に延長されたと考えれば、無生名詞の標識がゼロ形態でないことになんの不審もないのであるが、ガムクレリゼらが無生名詞を標示するとしている \*-t<sup>h</sup> / \*-k<sup>h</sup> という接尾辞はいったい何物なのか。これは容易ならない質問である。筆者にとって、それはサンスクリットにおける名詞曲用の規則からある事実をもぎとって以下のような説明を試みる以外に答えの見つからない難問である。

サンスクリットでは、子音語幹の男性・女性名詞は基本的に主格単数語尾として -s を、対格単数語尾として -am をとり、子音語幹の中性名詞は基本的に主格・対格単数語尾として -am をとったけれども、以下にあげる語幹を有する名詞の場合には事情が異なった。

1) 硬口蓋音語幹の名詞

女性の vāc- 「言葉」	中性の asṭj- 「血」
主格 vāk	主格 asṛk
対格 vāc-am	対格 asṛk

2) 歯音語幹の名詞

男性の pad- 「足」	中性の jagat- 「世界」
主格 pāt	主格 jagat
対格 pād-am	対格 jagat

3) 唇音語幹の名詞

女性の kakubh- 「虚空」
主格 kakup
対格 kakubh-am

4) 歯擦音語幹の名詞

女性の diś- 「方角」	女性の viś- 「家」
主格 dik	主格 viṭ
対格 diś-am	対格 viś-am

## 5)h 語幹の名詞

男性・女性の madhulih-「蜜蜂」	中性の madhulih-「蜜蜂」
主格 madhuliṭ	対格 madhuliṭ
対格 madhuli-am	対格 madhuliṭ

## 6)r 語幹の名詞

女性の dvār-「扉」	中性の vār「水」
主格 dvār	主格 vār
対格 dvār-am	対格 vār

サンスクリットでは、上の1)～6)からわかるように、音声的にある種の条件づけを受けた名詞には男性・女性の主格語尾-sあるいは中性の主格語尾-amが現れず、語末が-k/-t/-p/-rとなった。これらの語末は、ガムクレリゼらが指定している問題の無生語尾 $*-k^{h|} / *-t^{h|} / *-p^{h|}$ と無視できない程度に一致している。 $-k$ と $*-k^{h|}$ 、 $-t$ と $*-t^{h|}$ との重なりが偶然によるものでないとするれば、 $*-k^{h|} / *-t^{h|}$ という語末を有する無生名詞も、主格語尾を欠いた特殊な形態ではなかったかという考えが浮かぶ。実際のところ、ガムクレリゼらが無生名詞の標識として指定している $*-k^{h|} / *-t^{h|}$ はもともと接尾辞でなかった可能性が大きい。<sup>8</sup>そこで、そのような語末が本当に無生名詞に特有のものであったろうかと不審に思われる。サンスクリットでは、主格形の語末が-k/-t/-p/-rとなる名詞は男性名詞であったり女性名詞であったり中性名詞であったりしたが、これと同じように、 $*-k^{h|} / *-t^{h|}$ を語末に有する名詞は有生物も無生物も表したのではなかろうか。いい換えれば、それらは有生名詞にも無生名詞にも振り分けられない名詞群、つまり有生・無生の区別が未分化の名詞群であったのではあるまいか。これは、証明を伴わない単なる推論である。

ここまで有生・無生の対立が主格言語類型の特質であること、またそれが主語の形態すなわち主格を分かち二つの類として発達したものであることを論証しようとしてきたが、最後に、有生・無生の対立を対格の中で実現させているロシア語のことに触れておきたい。ロシア語は男性・女性・中性という性の区分を持つ言語である。二つの生は三つの性とどのように共存しているのだろうか。

ロシア語では、有生・無生の区別は活動体と不活動体という名をもって知られる。このように呼ばれるのは、問題の区分が現実世界における有生・無生の区分と若干ずれているからである。たとえば、「人形」は無生物であるのに有生物と同じ扱いをされ、「群衆」は有生物であるのに無生物と同じ扱いをされる。古代ロシア語では、「捕虜」や「奴隷」が社会的地位の低さゆえに不活動体扱いされたという。それにしても、活動体と不活動体は対格と具体的にどうかかわっているのか。このことを以下の表に基づいて説明

してみよう。

「有生物」名詞	男性	単数	「対格 = 生格 ≠ 主格」
		複数	「対格 = 生格 ≠ 主格」
	女性	単数	「対格 ≠ 生格 ≠ 主格」 / 「対格 = 主格 ≠ 生格」
		複数	「対格 = 生格 ≠ 主格」
「無生物」名詞	男性	単数	「対格 = 主格 ≠ 生格」
		複数	「対格 = 主格 ≠ 生格」
	女性	単数	「対格 ≠ 生格 ≠ 主格」 / 「対格 = 主格 ≠ 生格」
		複数	「対格 = 主格 ≠ 生格」
	中性	単数	「対格 = 主格 ≠ 生格」
		複数	「対格 = 主格 ≠ 生格」

この表からわかるように、ロシア語の「有生物」名詞は「対格 = 生格<sup>9</sup>」となることが多く、「無生物」名詞は「対格 = 主格」になることが多い。そこで、前者を活動体名詞、後者を不活動体名詞と呼んで名詞を二分するというわけである。が、しかし、事はこれで片づかない。問題は二つある。第一の問題は、女性単数名詞の扱いである。女性単数名詞は、何をもって活動体名詞に、あるいは不活動体名詞に振り分けられるのか。第二の問題は、活動体と不活動体の区別、つまり「対格 = 生格」と「対格 = 主格」との違いが何のために存在するのか、ということである。

女性単数名詞は大部分が「対格 生格 主格」である。つまり、対格は生格とも主格とも異なる形態を有する。このような名詞は、その複数形が「対格 = 生格」であれば活動体名詞、「対格 = 主格」であれば不活動体名詞と見なすことが一応は可能である。しかし、そのいずれに見なすにせよ、それは「対格 生格 主格」型の女性単数名詞にとってなんの文法的意味ももたない。

「対格 = 主格 生格」型の女性単数名詞は、-b の語尾を有する特殊な名詞である。このような名詞は、活動体か不活動体かの判別が難しい。というより、それを判別する文法上の基準がない。「対格 = 主格」か「対格 = 生格」かをその判別法にするならば、-b 語尾の単数名詞は不活動体名詞ということになる。そうすると困ったことに、その種の名詞は単数形が不活動体で、複数形が活動体になってしまう。これはすなわち、有生物が活動体であると同時に不活動体、無生物が不活動体であると同時に活動体になってしまうことを意味する。これでかまわないといえばそれまでだが、そうするよりも、女性単数名詞はすべて活動体と不活動体の区分に関して文法的に関与的でない、つまり女性単数名詞には活動体と不活動体の文法的区別は存在しない、という方が順当であろう。

活動体と不活動体の区別がある種の名詞において認められないか不鮮明であるのは、

それが歴史的な所産であること、それが長い年月をかけて徐々につくられてきたものであることと無関係ではない。ヴラスト(1986)によれば、人間を表す男性単数名詞にはじまった活動体・不活動体の区別は、次にその複数名詞に及び、さらに人間を表す女性複数名詞へと拡大し、17世紀には動物・馬を表す名詞がその区別を男性名詞から順に獲得し、18世紀に活動体・不活動体の文法カテゴリーが完成したという。これはしかし、活動体・不活動体の体系がいまある形になったのが18世紀であるという意味でしかない。女性単数名詞にその区別が認められないという意味において、それはまだ発展の余地を残している未完成の文法カテゴリーである、と見なすこともできよう。

さて、活動体と不活動体の区別は主体・客体関係を明示するためにはじまったものである。では、主体・客体関係を明示すること、すなわち主語と目的語の混同を避けることがなぜ必要になったかといえ、それは多くの名詞において主格と対格の形態的区別が失われてしまったからである。ロシア語には、いまもそうであるように、主語と目的語との間に語順の制約が基本的になかった。そこで、主格と対格を区別する形態が改めて必要となった。こうなったとき、生格形が対格として用いられるようになった。生格が対格にとって代わったのではなく、対格が生格を装うようになったのである。新しい対格として生格形が選ばれたのは、生格を目的語として従える動詞、すなわち本来的に生格を支配する動詞がロシア語に多かったからであろう。

このように考えるとき、中性名詞のことが不審に思われるかもしれない。中性名詞は主格・対格が同形であるのに、対格はなぜ生格形を装わないのか。答えは簡単である。不活動体を表す中性名詞は、他動詞文の主語となることがほとんどない。それはほとんど常に他動詞の目的語が自動詞文の主語である。したがって、わざわざ生格形をもって対格とするに及ばなかった。主格・対格に-oという語尾を有するロシア語中性名詞は、まさしく、主格・対格に\*-omという語尾を有したかつての無生名詞の生き残りなのである。

## 注

- 1 柳沢(1999:247)によると、コーカサスのアブハズ・アディゲ諸語では主体・客体関係を伝達する形態の有無が3人称において以下のように変化したという。

	名詞曲用	動詞人称接辞
共通アブハズ・アディゲ語	-	-
アブハズ語(能格言語)	-	+
ウピフ語(能格言語)	+	+
アディゲ語(能格言語)	+	+

このように共通アブハズ・アディゲ語が名詞曲用も動詞人称接辞ももたない言語であったとす

るなら、アプハズ・アディゲ諸語もまた中立型言語から生まれた能格言語であると見なされよう。

2 「いる」と「ある」の使い分けをもう少し詳しく述べると次のようになるろう。

(1) 「いる」を用いる場合

- 1) 有生物が動くか動きを止めるかして、ある場所に存在すると認識されるとき(例: 太郎が庭にいる。)
- 2) 無生物が、あたかも有生物であるかのように動くか動きを止めるかして、ある場所に存在すると認識されるとき(例: お月さんがあんな所にいる。 / 駅前広場にタクシーがいる。)

(2) 「いる」か「ある」を用いる場合

- 3) 有生物が、別の有生物の「所有物」であるかのように存在すると認識されるとき(例: 私には母がいる。 / 私には母がある。)
- 4) 有生物が、ある事柄の「該当者」として存在すると認識されるとき(例: プールで泳ぎたい人いますか。 / プールで泳ぎたい人ありますか。)

(3) 「ある」を用いる場合

- 5) 無生物が単なる無生物として存在すると認識されるとき(例: 車庫に車が何台もある。)
- 6) 有生物が動く自由を奪われ、「商品」として存在すると認識されるとき(例: 今日は生きてる鯛がありますよ。)

以上のような「いる」と「ある」の使い分けは、「ある」から「いる」への変化が起こった結果である。この変化は最初に上記の1)において起こり、続いて2)において起こったと考えられる。3)と4)は、「ある」から「いる」への交替が不完全であることを示している。なお、「昔、ある所におじいさんとおばあさんがあった」という表現は、過去の用法の遺物として理解すべきであろう。

3 「たち」「ども」「ら」と名詞との共起関係は以下のとおりである。(具体例があがっている箇所では使用可能、\*が付されている箇所では使用不可能であることを示す。)

	生物			無生物	
	人間	動物	植物	具象物	抽象物
中立的	娘たち/娘ら	*	*	*	*
擬人的	*	鳥たち	花たち	星たち	*
侮蔑的	男ども	狼ども	*	*	*

名詞の階層は、程度の差こそあれ、おそらくあらゆる言語に普遍的に存在する。日本語では、それが複数接尾辞の用法に投影されている。「たち」は本来、神または貴人にだけ用いられたというが、現在では人間一般に対して用いることができるようになっている。しかしそれを動物・植物・具象物に対して用いるとき、擬人的な響きがある。「祭り」「結婚」「死」などの抽象名詞にはいまでも「たち」を付すことはできない。このように日本語の複数接尾辞は、階層の高い名詞から低い名詞へ段階的に波及してきたといえよう。

ところで、日本語の複数接尾辞は、「太郎たち」のように「太郎とその仲間」といった意味を表すこともできる。普通名詞の場合にも、「Xたち」がXだけの集合を表していないことがある。たとえば「娘たち」という場合、純粹に「娘」の集まりではなく、「娘」以外の人間、



たとえば「母親」がそこに含まれている可能性もなくはない。ところが、「花たち」「星たち」という場合はどうだろう。「花たち」は「花」だけの集合、「星たち」は「星」だけの集合であろう。このように階層の高い名詞の複数形が「仲間」の存在を含意しがちであり、階層の低い名詞の複数形がそれを含意しないという事実は、階層が高い名詞はいくつか仲間をつくって存在し、階層の低い名詞はそれぞれが孤立して存在しているという認識を反映したものであるといえるかもしれない。

- 4 aoká は、本来、不定人称複数形である。このように不定人称複数形を1人称複数包括形として用いるのは北海道アイヌ語の特徴である。樺太のライチシカ方言には、包括形と除外形の区別はない。
- 5 チベット・ビルマ語派に属するリス語とナシ語には行為者を「強調」する際に用いる ne と nu という助詞があるが、本来これらは奪格助詞であり、これが具格助詞、能格助詞、さらには現在のような主格助詞に発達したと考えられている。また、北米インディアン語の一つであるシウスワワン語にも、奪格的な接辞に由来すると考えられる能格的形態が存在する。このことについては、別の稿で詳しく論じる予定である。
- 6 正確には、\*-om ではなく \*-m を対格語尾と見なすべきであろう。というのも、o 語幹の名詞に限ってこの語尾が付せられたからである。有生系列の \*-os に関しても、同様の理由により、本来の格語尾は \*-s であったと見なすのが妥当であろう。
- 7 ドイツ語の n 変化の名詞のうち、有生物を表す男性名詞 bote 「使者」<sub>メ</sub>、erbe 「相続人」<sub>メ</sub>、knabe 「少年」などが主格・対格異形であるのに対して、無生物を表す男性名詞 Bogen 「弓形」<sub>メ</sub>、Magen 「胃」<sub>メ</sub>、Tropfen 「しずく」などは主格・対格同形である。-en (< \*-om) という語尾を有するこれらの語は、有生物を表す本来の対格形が主格形に転用されたことを示すよい例である。ちなみに、ラテン語に由来する英語 factotum 「雑役夫」は有生物を表すのに -um (< \*-om) という語尾を有するが、これは「雑役夫」の社会的地位が低く、それがモノ扱いされたからであろう。
- 8 山口(1995: 248)によれば、バンヴニスト(1935)は印欧語にかつて \*-n/ \*-r/ \*-w/ \*-y/ (\*-s) という語末を有する中性名詞が存在し、これらが本来は接尾辞ではなく拡張子であったことを論証したという。
- 9 一般に属格と称せられる格をロシア語文法で生格と称する。

## 引用文献

- ヴラスト Vlasto, A.P. (1986) *A linguistics history of Russia*. Oxford: Clarendon Press.
- ガムクレリゼとイヴァーノフ Гамк्रेлидзе, Т.В., Вяч. Вс. Иванов (1984) *Индоевропейский язык и индоевропейцы*. 1. Тбилиси: Тбилисского университета издательство.  
(J. Nichols, tr., *Indo-European and Indo-Europeans*, Part I. Berlin · New York: Mouton de Gruyter, 1995)
- クリモフ Климов, Г. А. (1977) *Типология языков активного строя*. Москва: Издательство «Наука»(石田修一訳『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂, 1999)  
(1983) *Принципы контенсивной типологии*. Москва: Издательство «Наука»
- サピア Sapir, E. (1917) Review of C.C. Uhlenbeck, "Het passieve karakter van het verbum transitivum of

- van het verbum actionis in talen van Noord-America " *International of Journal American linguistics*,  
1: 82-86. (In W. Bright, ed., *The collected works of Edward Sapir*, V: 69-74. Berlin • New York:  
Mouton de Gruyter, 1990)
- 坂東省次 (1979) 「グアラニー語文法試論 ( その一 ) 」 『COSMICA』 ( 京都外国語大学 ) IX : 14-26.  
( 1981 ) 「グアラニー語文法試論 ( その二 ) 」 『COSMICA』 ( 京都外国語大学 ) XI : 84-98.
- バンヴニスト Benveniste, É. (1935) *Origines de la formation des noms en indo-européen*. Paris.
- フォーリー Foley, W. A. (1986) *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University  
Press.
- 柳沢民雄 (1999) 「ソ連邦における内容的類型学について ( 4 ) 」 『言語文化論集』 ( 名古屋大学言語  
文化部・国際言語文化研究科 ) 第 XX 卷 第 2 号 : 231-254.
- 山口 巖 (1995) 『類型学序説 ロシア・ソヴェト言語研究の貢献 』 京都大学学術出版会 .
- ラング Lang, A. (1975) The semantics of classificatory verbs in Enga (and other Papua New Guinea  
languages). *Pacific Linguistics*, B39.